

高木 典雄*: 日本産の *Dicranoweisia* 属Norio TAKAKI*: *Dicranoweisia* from Japan

J. Cardot は 1904 年に U. Faurie 師の採品に基いて *Dicranoweisia fauriei* なる種を記載した。これが日本における *Dicranoweisia* に関する最初の記録である。しかし本種はその後, Brotherus (1924) によって *Oncophorus* 属に移された。本種のタイプ標本が京都大学にあるので吟味してみたが, *Oncophorus crispifolius* に他ならない。飯柴永吉氏は白馬嶽の標本に基いて日本産蘚類総説 (1929) にはじめて *Dicranoweisia crispula* を記録し, 本種が日本にもあることを明らかにした。筆者 (1951) は本種を富士山頂より報告し, 野口彰博士 (1958) は木曾御嶽山から報告された。故桜井久一博士は 1934 年に本属下に *Dicranoweisia pumecicola* なる新種を記載された。これは鹿児島県伊集院町(軽石の上に生育)にける土井美夫氏の採集に基くもので, 桜井博士は本種を記載するに当って *Dicranoweisia cirrata* と比較し, それに比べて形態はるかに小さく, 葉の中央以上に乳頭密生するをもつて異るとされている。筆者は故博士ご存命中, 本種のタイプ標本を吟味させて貰ったが, これは *Dicranoweisia* 属のものでないことが判った。*Dicranoweisia* 属を認定するに重要な特徴の一つは, その雌苞葉が通常葉からはっきりと分化していることで (通常葉は長皮針形で先端は漸尖するが, 雌苞葉は長卵円形で蒴柄基部を包み, 先端は急尖する), この点でも *D. pumecicola* は *Dicranoweisia* 属のものとして一致せず, かえって葉縁の著しく巻く様, 葉形, 蒴歯構造など Pottiaceae の *Weissia controversa* によく一致する。又, 桜井博士は 1938 年に *D. pumecicola* var. *longiseta* なる新変種を記載された。本変種は前原勘次郎氏の熊本県人吉市における採品に基いている。このタイプ標本も故博士の御厚意で吟味することができた。博士は基準種に比べて蒴柄が長いということで変種とされたが, 吟味してみると *D. pumecicola* 即ち *Weissia controversa* とは蒴柄が長いというだけでなく, 蒴の形や蒴歯の構造もずっと異っており, 図に示すように *Weissia longidens* Card. に一致する。したがって現在のところ *Dicranoweisia* 属として日本に確認できるものは *D. crispula* 一種となる。本種は, ヨーロッパ北部, シベリア, 北米北部 (アラスカ〜カリフォルニア, フロッキー山脈, ミシガンその他), グリーンランド, ラブラドル等に分布し, 陳邦杰氏は 1963 年, その著「中国蘚類植物誌」で本種を内蒙古地区より記録している。日本において筆者が今迄に採集し得た産地は下記の如く何れも高山帯に限られている。

[*Dicranoweisia crispula* の産地] 富士山: 大宮口 3300 m (Tak. 9022), 吉田口 3400

* 名古屋大学教養部生物学教室。 Biological Institute, Department of General Education, Nagoya University, Nagoya.

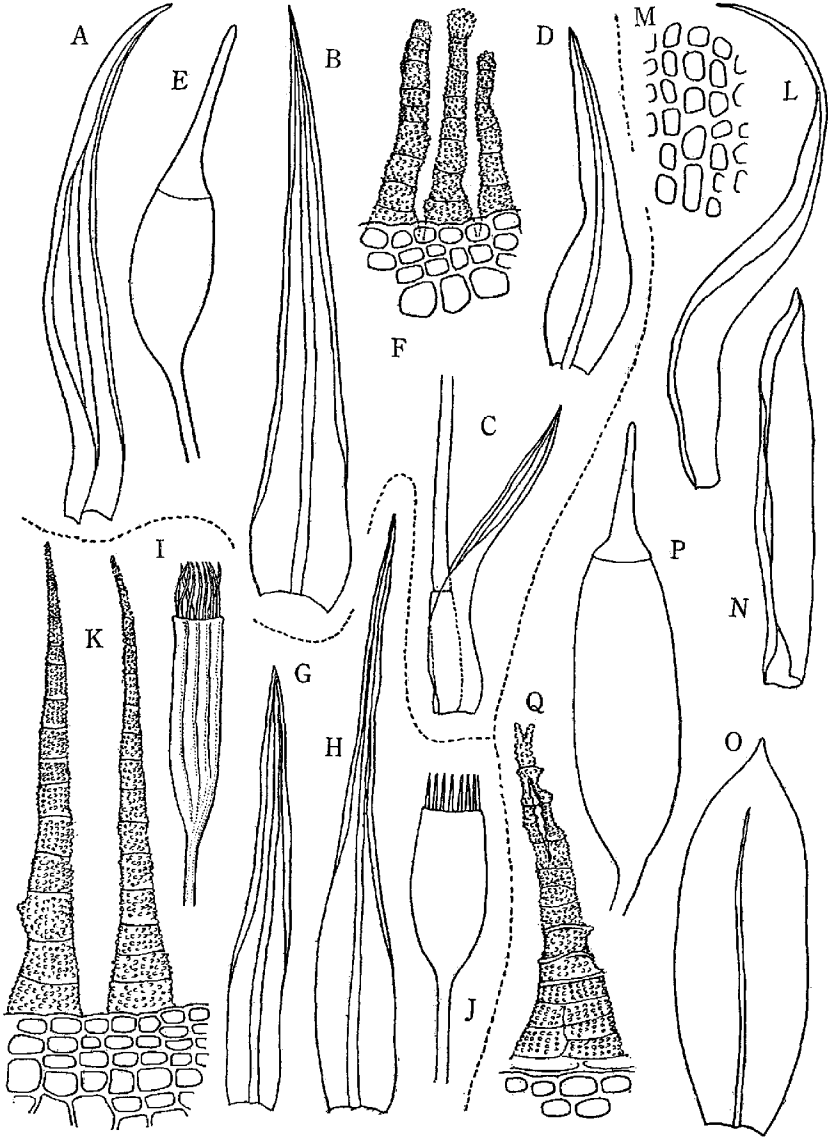


Fig. 1. *Weissia controversa* (A-F), *W. longiseta* (G-K) and *Dicranoweisia crispula* (L-Q). A, B, G, H, L. Leaves $\times 26$. C, D, N, O. Perichaetial leaves $\times 26$. M. Cells in the upper part of leaf $\times 250$. E, I, J, P. Capsules $\times 26$. F, K, Q. Peristomes $\times 250$. (A-F, drawn from the type of *Dicranoweisia pumecicola*, G-K from the type of *D. pumecicola* var. *longiseta*, and L-K from Tak. 27734).

m (Tak. 27734), 頂上火口壁 3700 m (Tak. 9027)。木曾御嶽山: 王滝口 2700 m (Tak. 29111)。北アルプス: 白馬嶽高山帯 (Tak. 6953), 針木峠 2600 m (Tak. 10457), 鷲羽岳 (Tak. 12489)。南アルプス: 荒川岳 2900 m (Tak. 6780), 仙丈岳高山帯 (Tak. 10007), 赤石岳 3000 m (Tak. 6803)。

高山帯でも特に岩礫地帯に多く、岩隙又は岩上の腐植土に団塊状の群落をつくる。本種と近縁のものに *D. cirrata* なる種があるが、日本からは今のところ未記録である。日本産の *D. crispula* には欧産の標本と比較して葉細胞が大きく、葉の上半にある乳頭も不明で、葉縁の巻きこみも少ないものもあるが、特に区別するなどの差異とは考えられない。*Dicranoweisia* は外觀からすると *Dicranaceae* というよりむしろ *Weissia* その他の *Pottiaceae* のものに似ているところから、逆に *Pottiaceae* のものが *Dicranoweisia* として記載される場合がでてくること前述の通りであるが、顕微鏡的構造において *Dicranoweisia* 属では (1) 種によって葉翼部の細胞に分化のみられるものがあること、(2) 雌苞葉が一般によく分化すること、(3) 蒴歯は全体に乳頭を有し、先端において 2 裂するか又は 2 裂する傾向を示し、下半分の乳頭列は縦線状を示すなどの点で *Dicranaceae* としての特徴をもっている。

* * * * *

By the courtesy of the late Dr. K. Sakurai, the writer examined the type specimens of *Dicranoweisia pumecicola* and its variety *longiseta*. After careful examinations, the writer proposes here to reduce Sakurai's species and variety as below:

Weissia controversa Hedw. — *Dicranoweisia pumecicola* Sak. Bot. Mag. Tokyo 48: 383. 1934, syn. nov.

Sakurai, no. 1724 Ijuin (Pref. Kagoshima), specim. typic.

Weissia longidens Card. — *Dicranoweisia pumecicola* Sak. var. *longiseta* Sak. Bot. Mag. Tokyo 52: 468. 1938, syn. nov.

Sakurai, no. 11260 Hitoyoshi (Pref. Kumamoto), specim. typic.

Hence, we have only one species of the genus, *D. crispula*, which is distributed in the alpine region of Japan.

正 誤 (Errata)

頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)	頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
71	17	pl. 239	pl. 293	100	39	SWITZERLAND	SWITZERLAND
76	7	4:	4: 609-624				
98	3	so far as	so far as at	100	40	NOOWAY	NORWAY
100	10	SWITZLAND	SWITZERLAND	102	3	含有分	含有成分